

にも通信

にも
包括

精神障害の有無や程度にかかわらず、誰もが安心して自分らしく暮らすことができるよう、包括的なシステムを構築していく取り組み

発行：相模原市精神保健福祉課

今回のにも通信では「地域移行支援ピアサポーターの意見交換会」の様子と「措置入院者等の退院後支援」における効果と課題についてご報告します。

今回は、相模原市で養成している「地域移行支援ピアサポーター」の皆さんとの意見交換会に潜入した様子を報告したいと思います。

地域移行支援ピアサポーター（以下、ピアサポーター）とは、精神科に長期入院中の患者さんの地域移行や、精神障害者が地域で自分らしく暮らしていくための体制の整備を図ることを目的として、平成29年から養成を開始しました。相模原市が実施する養成研修を修了した方のうち、ピアサポーターとして活動することを希望された方を登録しています。主な活動内容としては、病院訪問などにより地域移行に関する意欲喚起や普及啓発、研修や講演会などによる精神疾患への理解の促進やステイグマの解消などがあります。

コロナ禍により病院訪問が思うようにはできませんでしたが、あらためてピアサポーターの皆さんの思いを聞いてみました。意見交換会には4名のピアサポーターの方がご参加くださいました。

病院訪問について

山口 H29からこの活動が始まり、これからと期待していた矢先にコロナ禍となり、病院訪問ができなくなりました。コロナ禍前までは実際に病院に向いていって、入院患者さんと対面で交流することができていました。実際に会って話せるという機会は大切にしたいと思っています。

利光 具体的には退院後に生活保護を受けることに不安があるとか、そういう話がありました。自分も似たような経験をしていたのでも、その経験を伝えることで安心を感じてもらえたと思います。患者さんから直接的な反応があったので、こうした活動ならできるかも、と自分自身では手心えを感じていました。

地域移行支援ピアサポーター 意見交換会

山田 お話した方は元タポテンシャルのあった方でしたが、私たちの訪問をきっかけとして、就労移行支援に進んだことを聞いたことが印象に残っています。自分たちの訪問が少しでも前に進むきっかけになったのであれば嬉しいなと感じました。

病院訪問に向けて準備しておくこと

山口 何かに答えるという以外にも、雑談や話を聞くだけ、というような訪問にも意義があると思います。病院のスタッフさんは忙しかつたりするので、なかなか呼び止めて話をするということにハードルがあったりするので、そういう希望に応えたい気持ちもあります。

利光 地域移行支援ピアサポーターなので、「退院してよかったよ」というメッセージを伝えていきたいところですが、必ずしも退院を希望している人ばかりではないです。戻り場所がないとか、不安とか、理由は色々あると思います。入院には制約（ルール）もありますが、逆に守られていると感じたり、心地がいいと感じる人もいます。

山口 たしかに退院して一人になったり、まだ症状が残っていたりするとなかなか不安が拭えないこともあります。入院中であれば、誰かしらがいるという安心感のようなものがあるのが大きいですね。



▲ ピアサポーターの山口さん

病院訪問の目的について

山田 いきなり退院についての話をしてもピンとこないと思うし、色々なことを話せるようになるには関係性がとても大切。まずは雑談など、話し相手になることを目的に訪問できたらいいなあと思います。

▼ ピアサポーターの山田さん



上杉 逆の立場だったらいきなり来られて退院の話をされても・・・と感じてしまっても。まずは雑談など、気軽に話をするところから取り組みたいですね。

利光 皆さんが言うように、退院や地域移行の話をして「この人たちは何者？」となると思うので「話し相手に来ましたよ〜」くらいの感じで訪問できたお互い気楽かなと思いました。そうした関係の中で希望がある人には、退院や地域移行の話に繋がれたらと思います。1回のみで終わってしまう単発の訪問活動ではなく、継続的に訪問することが大切だと思います。

山口 私もまずは話し相手からなのかなと思います。この人たちに話してもいいかな、と思ってもらえるようになることが第一歩。その中で関わり方のアドバイスや、言葉は悪いかもですが、周りでサポートしてくれる人たちをどう利用すればいいのか、暮らして困っていることなど、入院中の困りごとへの相談に乗れるような活動をしたと思います。

ピアサポーターの活動については今後「にも通信」などを通じてご報告していきたいと考えています。

措置入院者等の退院後支援とは

※ 措置入院：2名以上の精神保健指定医の診察により、精神障害のため自分を傷つけたり他人に危害を加えようとするおそれがあると判断された場合、都道府県知事の権限により措置入院となる

措置入院者が退院後に継続的な支援を受けられ、社会復帰につながるよう、必要な支援体制を整備することを目的として、自治体が主体となって行うもののことを言います。

具体的には、対象者が入院している病院に職員が会いに行き、入院中の困りごとや、退院に向けての希望や不安について伺います。聴き取った内容を踏まえて、対象者やその家族、支援関係者を交えた会議を開催し、退院後支援計画を作成します。退院後は計画に沿った退院後支援を提供します。支援期間は退院後6ヶ月以内です。

体制について

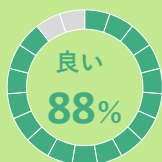
精神保健福祉課に社会福祉職3名、保健師1名を配置する専任班を設置。 ※専任班の設置は全政令市で5自治体のみ



タイムリーな支援、スムーズな連携やサポート体制の構築、対応の差が少ない、などの設置当初から強みとして掲げていたことが、評価として得られました。また、支援機関の連携、役割分担によって、支援者の負担感の軽減や支援の視点が広がるなどの意見もあり、退院後支援がチームで取り組むものであることを再確認することができました。

個別ケース検討会議について

国ガイドラインで示された新規業務。これにより自治体が入院中からアプローチを行い、退院後の支援体制をコーディネートしていくことにより、支援対象者を支えるチームが作られる。



【開催について】

本人、家族を含めた関係機関の顔の見える関係づくりの一步であり、情報共有・共通認識、今後の方針が統一される場となっている。

【開催時期について】

入院中に開催することで、関係機関が集まりやすく、それぞれの支援内容や役割分担、サービス等の調整が行いやすい。医療機関からの見立ても得られることが支援機関の安心に繋がっている。

支援の濃淡について

「支援の濃淡」は、支援の必要、不必要を判断するものではなく、その背景を多角的に評価し、より支援の必要な対象者に積極的に支援を届けていけるようにする視点。

高頻度で重点的に関わる手厚い介入や、必要に応じた見守り、適切な機関への繋ぎといったように、支援の濃淡を意識したアセスメントとマネジメントスキルが求められる支援といえます。

濃

淡

効果と課題

効果

- ◇退院後支援に特化した専任班ができたことで、退院後支援に関する情報が一元化され、切れ目のない支援が提供できるようになった。
- ◇設置前の課題であった部分(状況に応じたタイムリーな関わり、複数対応等)が改善し、寄り添い、伴走型の支援を行うことができるようになった。
- ◇個別ケース検討会議の開催により、顔の見えるつながりができ、支援機関の強みが明確になった。専任班による取組が、支援者間の連携体制の構築にも効果的であることが示唆された。

課題

- ◆不同意者への支援介入の困難さや支援の質の維持に伴う人材確保・育成は精神医療保健福祉全体の課題といえる。
- ◆支援を必要とする方に必要な支援を提供できるよう、退院後支援の支援対象者の様々な背景や個性に留意し、支援の濃淡を意識したアセスメントスキルが求められている。

けやきロック2024

今年もNPO法人けやきの会が主催する「けやきロック2024」が開催されました。「学園祭 君の瞳に恋してる」をテーマに三線あり、ダンスあり、もちろんけん玉あり。満員御礼の大成功だったようです。

超個人的に注目していたのは、けやきの会メンバーによる一発芸メドレー。独特なクオリティによる「自分らしさ」をステージ上で十二分に披露されていました。また来年が楽しみです!!



▲大盛り上がりだった一発芸メドレー

会場内を駆け回っていた山田く
恋の行方は…



編集後記

今回特集した、専任班設置による措置入院者等への退院後支援の取組は、今後ますます重要度が増していくものと思われます。

「支援を必要とする方に必要な支援を提供」するためには、訴えを遮ることなく、丁寧に傾聴する姿勢が大切であり、その上で寄り添い、その人らしい生活が営めるように共に考えていくことを大切にすべきだと考えています。

このような取組が対象を限定した退院後支援に留まることなく、希望するすべての精神障害者に実施されることで、不必要な長期入院が減ることや地域での安定した生活の継続につながることを期待されます。また、その積み重ねが、社会全体における精神障害者への理解の裾野を広げ、誰もが安心して生活を送ることのできる地域包括ケアシステムの構築、共生社会づくりの一步になると考えています。

